横須賀水交会

「司令官挨拶」

護衛艦隊司令官　髙嶋　博視

三年間の陸上勤務を経て、七月三日付で「艦隊に復帰」しました。どうぞよろしくお願い致します。また、着任に際しましては、多くの先輩から心温まる励ましのお言葉を賜りました。この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

私は護衛艦隊司令官として、隷下の隊員に対し「任務に忠実であること」を強く求めています。その心は、先の大戦において弾の下をくぐられた多くの先人先輩が「極限の状態にあって本当に力を発揮したのは、つまるところ責任感の強い者であった」と述懐されていることにあります。個人の能力発揮には、乗員一人ひとりの判断力や技量、気力、体力等いろいろな要素の相乗効果によるものと思いますが、いよいよの局面においては、その人が自分の配置、職務、任務にどれだけの責任感や使命感を持っているかに拠る、と考えております。

前配置（海幕人事教育部長）におきましては、様々な事故や事案が起きる度に短期的な所謂対処療法や、より中長期的な観点から、関係する制度の見直し等について検討してきました。それはそれで必要かつ重要なことでありますが、私のつたない経験に照らしても、基本的には、指揮官の力強いリーダーシップの下で絶対多数の隊員が一つの目標に向かっているときに不祥事など起こり得ないと思っています。勿論言い訳がましいのですが、不軌弾はあります。

タガの外れ或いはタガの緩みかつ自浄能力の欠如した組織の末路が、いかに惨めであるかは歴史が示すとおりです。また、外れたタガを入れ直すには、計り知れない体力と時間を要します。そういう意味においても、ビシッと背筋が伸びた護衛艦隊の建設、練成に微力を尽くす所存であります。

皆様ご存知のとおり、海上自衛隊とりわけ護衛艦隊は、今年度末、まさに歴史的な変革（編成替え）を予定しています。目下のところ、この体制移行が円滑にできるよう、前司令官保井海将が尽力されたラインに沿って、細部の詰めを行っているところです。

昼休み、椅子に背をもたせて目を閉じますと、岸壁から新入隊員（春っ子）が練習するサイドパイプの音色が心地よく聞こえてきます。今は真っ白な状態にあるこの子らが順調に育って実力をつけてくれるよう期待すると同時に、海上自衛隊は健全な組織であるとの思いを強くしております。

護衛艦隊を今後とも温かく、そして厳しく見守って頂きたいと存じます。

発行　平成十九年十月十四日
編集　横須賀水交会事務局

横須賀水交会主要行事予定

来年三月までの主要行事予定は、次のとおりです。多くの会員の参加をお願いします。

1　理事会

（1）期日　十二月十五日（土）
一四〇〇～一七〇〇

（2）場所　横監（細部未定）

（3）会議後、懇親会

2　合同賀詞交歓会

（1）期日　一月十二日（土）
一三三〇～一五三〇

（2）場所　横須賀商工会議所

（3）会費　四千円（女性二千円）

3　その他

平成二十年度総会が来年四月に予定されております。

会員皆様の参加をお待ちしております。

参議院議員選挙を振り返って

…同志の絆…

横須賀水交会副会長　長崎　嘉徳

選挙の当たり年であった今年の後半戦の選挙も終わり、髭の隊長佐藤正久氏が比例参議院選挙で自民党に大逆風の吹く中二十五万一千五百七十九票を得票、見事に当選し、見識豊かな彼の今までの経験から今後、国政の場での大いなる活躍が期待される所である。

今回の参議院選の結果参議院での与野党が逆転、参議院で第一党になった民主党はテロ特措法延長に反対し、国際公約となっている海自補給艦のインド洋への派遣が暗礁に乗り上げ新法の作成等今後の国会の動向が注目される。

この様な不透明な国内情勢の中、佐藤参議院議員の誕生は正に天に口なし人を以って言わしむ事であったのではなかろうか。

参議院選挙といえば三年前の選挙で防衛出身候補の総決起大会において当時の青木参議院幹事長が「国政の場に一人として議員を送り出せないような省庁を面倒見る事は出来ない」と発言した事が脳裏をかすめる。正にこの三年間は自衛隊にとって装備、隊員の処遇面等各部にわたって氷河期が訪れていたのではなかろうか。

ここで当地における今夏の参議院選挙を振り返ってみたい。

参議院比例選の地方における組織固めはつかみ所のない求心力のため難しいとされている。今期選挙での組織作りは四月の市議会議員選挙での力強い会員組織の余勢を駆って拡充を図り、「佐藤正久を支える会」本部との緊密な連携をとるため県選挙管理委員会承認の政治団体を結成した。この組織の中核を担ったのは曹友会、どんがめ会、隊友会武山支部、横須賀水交会の有志、経補グループの升友会それに賛同する有志のグループ等であった。市議選の時はやや傍観的であった隊友会横須賀支部も県連の指導の下、途中から政治団体「佐藤正久を支える会横須賀支部」に加わりここに横須賀地区ＯＢが大同団結する事となった。

活動拠点は曹友会の好意で曹友会二階の立派な事務所となり活動を買って出てくれた役員等は選挙戦の終わるまでの期間、ポスター掲示、チラシの配布、電話作戦等の作業で貴重な自らの時間を割き、さらに手弁当持参で正にボランティア活動に徹しその奉仕には心打たれるものがあった。

活動に当たっては自衛官のＯＢらしく正々堂々と行動し、クリーンで選挙違反は絶対に起こさず、金を使わないとした西村選対本部長の指導の下、役員会で緊密な意思疎通を図りながら業務を進めて行った。

街宣車が超過密スケジュールの中横須賀入りし、各部隊前での街宣時、特に総監部、自衛隊病院、艦船補給処、2術校では隊員の選挙への関心、熱い視線が感じられ本部からの街宣隊長を感激させたものであった。当該部隊指揮官の見識に脱帽である。

今回の参議院比例選挙から「標旗隊」が新設され、選管が承認した標旗周辺でメガホン片手に街宣活動を行う事となった。佐藤候補のトレードマークの「絆」の文字が入ったＴシャツを着て声を張り上げながらの街宣に多くの女性会員が積極的に参加してくれ、重点地区に絞った乗降客の多い京急の主要な五駅での二十～四十分間の活動は、準備したうちわ式のチラシが思いの他一般大衆に受け取られる等佐藤候補を深く印象付けたものであった。

北富士から回航されたレンタカーを夜間館山に回航するまでの僅か一日間の標旗隊であったが、参加者一同暑さの中汗を拭き拭き同志の絆を更に強くしたものであった。

得票結果はすでにご案内のとおりであるが横須賀市で四千二百二十三票であった。目標とした票数にはるかに及ばないものの前回の参議院選での防衛庁出身候補三名の得票数計二千六百三十六票に比し今回の活動の成果が見て取れるし、また役員の活動が市内にとどま

らず市近郊さらに全国の親戚、友人へと向かっていた事から隠れた成果がある事も論を待たない。自衛隊主要所在部隊の得票数は海自が大湊六百四十四票、呉一千三百四十五票、佐世保二千四十一票、舞鶴一千二百六十二票で前回の選挙に比べ呉、佐世保、舞鶴が夫々六百～八百票上乗せしている状況である。他自所在地では札幌五千三百四十二票、千歳三千四百九十二票、仙台三千七百三十八票、入間、狭山、所沢三千百十七票で政令指定都市の札幌に続き横須賀が大得票田であった事が分かる。

今年から不在者投票数、期日前投票数が多くなった事を理由に横須賀選管がそれらの投票数を本来在住の投票所へ繰り入れる事を止めた為、隊員の投票率の分析は出来ないが街宣時の隊員の選挙への高い関心度、各級指揮官の隊員指導による過去の投票率の分析状況が百％近い事から今期投票率も極めて高いものであったと推断できる。

しかしながら海自隊員だけでも横須賀在住有権者数が六千名を超え家族を入れれば推し量るべく数になろうし、さらに同志である二千二百名余のＯＢとその家族を含めての総人数から今回の佐藤候補が得た得票数は余りにも少ないのではなかろうか。

参議院比例選挙は候補者個人名あるいは政党名のいずれの投票も可能である事から以上の懸案は、横須賀市で四万六千八百五十九票の自民党政党名得票数が、候補者個人名の得票数と合わせた自民党合計得票数の約七十％を占めている事から、政党名で投票をしたのではないかと考えられる。

過去「拘束名簿方式」で各政党名簿に候補者の順を選挙前から決定していたが、六年前の前々回の参議院選挙から「非拘束名簿方式」に改定され、事前に順位を決定せず候補者個人名の得票数が当該政党内の順位となり、候補者個人名の得票がなければ全く勝負にならない事となっている。

現役の隊員には以前から各指揮官等を通じ改定された選挙方式の指導が行われており、ＯＢには電話作戦を通じその都度説明してきた所であるが、両者の選挙方式の認識は未だに浅い事を選挙結果が物語っており反省させられる所である。

国政選挙は自衛隊にとって、防衛、安全保障政策が国策である以上極めて重要な選挙である事には言を俟たない。一方自衛隊組織、現役隊員の選挙活動は厳しく禁止されおり俄然ＯＢが彼らに成り代わって組織の精強維持のための予算面及び隊員が自信と誇りを持てるよう地位、名誉の獲得に向かって外堀固めの選挙活動に大同団結していかなければならないと考える。しかし前述したように国政選挙での求心力は漠然としており、そのためにも地元地方選挙から同志の団結を構築して行く事が肝要であろう。

これらの活動を通じＯＢとしてのメリットは無く、あるのは国益、自衛隊組織、隊員個々に対する支援のみである。だからこそＯＢである我々は、現役隊員が自分達の組織を深く理解し自衛隊のために政治的に大いに役立ってくれる者に選挙権を行使するとした帰属意識の高揚が図れるよう常日頃から暖かく支援して行かなければならないのではなかろうか。

最後に、地元の竹内県会議員が自民党県連幹事長の多忙な要職にありながら応援演説に駆けつけ、さらにポスター掲示の支援をしてくれた事、横浜市金沢区の峯尾元県会議員が自らのポスター掲示板への佐藤候補のポスター掲示を快諾、さらに自らの後援会の多くの方々を紹介してくれ、金沢区で横浜市断トツの六百三十一票を得票できた事を記憶に留めると共に深甚なる敬意と感謝を表し今夏の参議院選挙の締め括りとしたい。

「横須賀市議会便り」

市会議員

（横須賀水交会理事）　木下　憲司

今年の夏は暑かった！
地球温暖化の影響？

真夏の猛暑もやっと終わり、秋風とともに過ごしやすくなってきた今日この頃です。

さて、今回の横須賀市議会報告は、第三回定例会(九月十八日～十月十七日)の議事等の一部を紹介したいと思います。(注：定例会は年四回招集され、通例では三月、六月、九月及び十二月に開かれます。)

まず最初に、原子力空母配備問題に関する、最近の情勢です。来年八月予定の原子力空母配備へ向けて、行政として幾つかの取組みがされています。八月下旬から九月上旬にかけて、市内各所で、「原子力空母の安全安心対策説明会」が開催されました。また、十一月八日には、日米合同原子力防災訓練が予定されています。説明会及び防災訓練ともに、市民の間に安全安心感を醸成することに役立つと思いますし、知識不足の故に不安感を持つ市民への啓蒙になっていると思います。残念なことは、数人の議員が、「市として、空母配備が国の専管事項というのであれば、説明会は国が実施すべきで、横須賀市が説明会を実施することに反対」との抗議をしたことです。いたずらに市民の不安感を煽り、その挙句に説明会に反対する非建設的態度は常識人としての見識が疑われます。

次は教科書問題です。市議会に対し、「高校教科書検定における、沖縄戦集団自決に関する記載内容の修正指示撤回を求める意見書提出について」という(長い名称の)請願が出されました。これは、高校日本史教科書検定において、旧日本軍が住民に「集団自決」を強制したとする記述が削除された問題を取り上げ、記述の復活を求める意見書を、市議会が国へ提出せよという内容です。この請願は、当然のことに反対多数で否決されました。(市議会として意見書を提出しないということ)この記事を書いている十月五日現在、この件は国会でも問題となっており、政府としてどのような決着を図るのか予断を許さないところですが、集団自決への軍の関与が歴史事実として認められない限り、軽々に決めつけるべきではありません。また、教科書問題に政治が介入する愚を犯すべきではないと思います。そして、なによりも自虐史観から脱して、健全な国民精神並びに愛国心を育む必要を痛感します。

(会員投稿)

五十八歳の大学院生

横須賀水交会会員　佐野恭子

まさか…十九年度総会への出欠ハガキの「近況」に茶目っ気半分に書いたものが思いもかけずそのまま載り、冷や汗をかきました。「反響があったので横須賀水交会新聞にもう少し…」読者平均年齢は六十代半ばとの事、知的好奇心のエネルギーと若々しい気力に共感しました。

(一)海上自衛隊とのかかわり

私は東京女子大心理学科を卒業後は家庭にいて職業を持ったことがないが、人とのつながりを大事にしている。頼まれて中学のクラス会をした。古い友人の話は一つの人生を聴き取るようで、ドラマよりもはるかに深い。また、創立百周年になる母校の埼玉県立浦和第一女子高校と県立浦和高校(男子校)のジョイント同窓会を企画し実行することができた。前後して新潟の中学校校舎が取り壊されるのを機に、「惜しむ会」を企画し十学年が一堂に会した。老いた恩師は喜ばれた。

海上自衛隊とは十五年ほど前、日米協会の新年会に制服で出席された河村雅美一佐(当時)とダンスを踊ったのが縁でした。こんなにも素敵な海上自衛隊の存在を知ってもらいたくなって、「海上自衛隊と民間人のジョイント会」を創りたいと河村さんに持ちかけた。主人が慶応大学工学部教授なので知り合いの教授、夫人が多かった。「教授夫妻とゼミ院生に限る」として河村一佐から幹部学校見学会の案内が届いた。中目黒の幹部学校を訪れると図演装置の巨大なスクリーン一杯に「歓迎・佐野女史ご一行」と書かれ、さまざまな装置はＮＡＳＡ宇宙センターを見る思いがした。図演装置担当の方々が解説や講義をしてく

れ、質疑応答が活発に続いた。終わった後も中目黒の居酒屋で懇親会ということで十時過ぎまでドンチャン騒ぎ。皆で大騒ぎして楽しんだ。それ以後のジョイント会は居酒屋を使わず、幹部学校におにぎりやサラダを担いでいって勉強会を続けた。参加範囲も親しい友人に広げ、議論は熱気に充ちた。全く知らない世界をぶつけあうことに夢中になった五十代初めのおじさん、おばさん達。新しい世界を知る喜び！

（二）大学院を目指す

私も老いた…このままで死にたくない、何処かで自分を試したい。そんな折、大学の恩師からアンケート調査が来た。「中年の友情」…夫婦で回答するプライベートなものだ。「先生、サンプルの数は足りていますか？」「ああ永瀬さんか。足りないよ…。」旧姓は三十六年間の空白を一瞬で飛び越えた。「調査用紙をもっと送ってください。友人に手渡して回ります！」初夏、友人達からは「佐野さん自身の調査じゃないの？」。私は「俵 万智が褒めたマンガ『黄昏流星群』を読んだの。その中で、六十代、七十代、八十代でさえある人生最後の恋。私たち団塊の世代も、老いが直ぐそこまで来ている。老人ホームで恋をする人もいると聞く。晩年を自分らしく、楽しんで死にたいよね。老いても人間として誇りを持って生き生きとさ。」海上自衛隊の方々からも、アンケートに多くの協力を得た。これを機会に、「老い」を研究テーマとして、大学院受験が芽生えた。

秋になって、大学院を探した。試験は八・九月と二月にあるが、大学院で外部生を採るのは僅かだ。インターネットで教授にコンタクトできた大学はアポを取りお目にかかった。日大の岡教授に「団塊の世代の生きがい・迎える老い」をテーマとした研究計画を見ていただいた。「あー良いですねえ。学部の卒論にぴったり。学部三年生に編入しなさい。」と言われた。研究内容を二回説明したが、大学院での研究の同意が得られず断念した。その時、主人が「君を採ってくれると言う教授がいたら、その先生に付きなさい。研究テーマは、その先生のしていることをしなさい。」さすがはプロ。あいうえお順で日大教授のホームページは並んでいた。岡教授の前は嚴島教授。嚴島教授にお目にかかって一発で決めた。この教授のところに飛び込もう。

冬に入って受験勉強に追い込みを掛けた。八重洲ブックセンターで参考書を何冊も買っては読んだ。けれど三十六年間のブランクは大きい。自信が持てない。「日大は私なんか採らないですよ。卒業させても就職しない院生なんか採りませんよ。」と弱音を吐いたら、七十代の友人が言った。「佐野さん、あなたは就職のために学問をするのですか？」私はその時初めて「学問」と言う未知の世界を見つめた。学問…本は手のひらに載るほど小さい。けれど紐解けば世界よりも大きい…。友人が弁天様のお札を貰ってきてくれた。試験は英語と専門科目、英語は英文和訳、専門は八百字で項目の説明。

合格と聞いたときは嬉しいよりボーッとした。桜の咲くころ身体検査があり、「大学院女子」という時間に登校、大学院生としての第一歩を踏み出した。同期は全員二十二歳。

（次号に続く）

補給艦「ときわ」見送り

七月十三日、テロ特措法に基づきインド洋方面における、各国に対する支援活動を実施するため、補給艦「ときわ」（艦長　菅原貞眞二佐・乗員約百三十名）が横須賀を出港した。

第六護衛隊司令　尾島義貴一佐が派遣部隊指揮官となり、護衛艦「きりさめ」（定係港・佐世保）と洋上で合同し任務行動に赴く。

自衛艦隊司令官、横須賀地方総監他多くの指揮官、隊員及び家族等関

係者とともに、佃　剛横須賀水交会会長以下多数の会員で見送った。

台風四号の前兆の雨のなか、水交会旗、自衛艦旗の小旗が振られ、超長音の汽笛が響く印象深い出港であった。

「ときわ」にとってテロ特措法による任務行動は五回目で、乗組員の約六割が二回以上の経験を積んでいるとのことであり、各国艦艇とのゆるぎない信頼関係をさらに強めてもらいたい。

出港前、士官室において、水交会からの激励品を佃会長から艦長へ贈呈した。

長期間にわたる任務行動に対し、深甚の敬意を払うものである。

乗組員の皆様、本当にご苦労様です。任務達成を祈ります。

（本多理事長　記）

第二十九回少年海洋学校開催

横須賀水交会主催の少年海洋学校が、八月九日から十一日までの二泊三日、横須賀教育隊で実施された。

少年海洋学校は、体験入隊の機会を利用し、海に親しみ、学ぶことにより、海洋立国日本の次世代を担う青少年に海事に対する関心を持ってもらうとともに、海上自衛隊の一端を見てもらうことを趣旨としている。

今回は小学四年生から中学二年生までの男子二十七名女子七名の計三十四名が参加した。地方協力本部が募集した二十一名とともに、基本教練、水泳訓練、短艇訓練、手旗訓練、結索訓練等に元気に取り組んでいた。

訓練内容は、興味を持続させるよう担当教官が工夫をしており、暑い中の訓練にもかかわらず、最後までやり遂げていた。

特に、短艇訓練は、波の静かな午前中に予定を変更して実施されたこともあり、大きなオールを懸命に漕いで防波堤の外まで出る事ができた。自信が持てたらしく、次回は沖まで漕ぎたいと述べていた生徒も多数いた。

慣れるにつれ次第に団結心がめばえ、修講式前の後片付けでは、上級生は下級生に指示を出し、下級生は上級生を頼りにして指示を仰ぐようになり、団体生活を体験した成果が感じられた。

少年海洋学校を成功裏に終えることができたのも担当教官の努力のおかげであり関係各位に感謝したい。

（上田理事　記）

恒例の夏期防衛講座開催

演題「朝鮮半島情勢の見方」

武貞秀士氏

横須賀防衛諸団体合同夏期防衛講座が八月二十四日（金）午後、講師に防衛研究所武貞秀士統括研究官をお迎えし、記念艦「三笠」大講堂で開催された。本講座は、毎年、横須賀防衛関係十一団体が共同で開催しているものであるが、今年は横須賀水交会が主幹事として、総務・企画担当の理事を中心に、計画、準備、運営の任にあたった。

当日は今年の夏を象徴するような猛暑であったが、朝鮮半島問題への関心の高さ、また、この分野のスペシャリストである講師の知名度の高さなどから、現役自衛官及び国・県・市会議員など来賓、防衛諸団体の会員、一般市民等合計約三百名が参加、会場は満席の盛況であった。

定刻の十五時半から、土井理事の司会により、小山満之助防衛協会会長の挨拶、佃横須賀会長による講師の紹介に引き続き、武貞講師により

「朝鮮半島情勢の見方」と題して、二時間に及ぶ講演が行われた。

講演は講師が一九九〇年代から十回以上行った中朝国境視察などで調べた、北朝鮮の状況等を豊富な写真により判りやすく説明した後、朝鮮半島情勢の見方を六点にまとめて、それぞれのキーワードについて詳細な説明があった。本講演前日まで、韓国において米韓の軍人等と議論してきたばかりであり、最新情報に基づく内容であった。

「北朝鮮の豊富な地下資源と中国への輸出」「近代化した韓国と前近代的な北朝鮮」「北朝鮮の核開発へのこだわり」「米国の対北政策の変化」「韓国から北への莫大な援助」などなど、朝鮮半島問題解決の難しさを改めて思い知らされた。拉致問題、核問題、六カ国協議、韓国大統領選挙の行方など、日本への関わりが大きいだけに、参加者は熱心にメモを取っていた。また、質疑応答も時間一杯使い、本問題に対する関心の高さを示した。

講演終了後は上甲板に移動し、自衛艦隊司令官、横須賀地方総監はじめ各級指揮官、先任伍長も加わり、納涼懇親会を開催した。会員相互また現役自衛官との懇談は弾み、時間の経過を忘れるほどの盛会であった。

（岩永理事　記）

部隊研修

研究開発のメッカ開発隊群

横須賀水交会は、十月十日（水）午後、「開発隊群研修」を実施した。

佃会長以下約五十名の研修参加者が船越地区の真新しい「開発隊群庁舎」に集合し、東郷開発隊群司令から「海上自衛隊の装備について」と題する講話をいただいた。その中では、16ＤＤＨ「ひゅうが」を始めとする建造中又は計画中の新型艦艇や九月下旬に初飛行した次期固定翼哨戒機（Ｐ―Ｘ）並びに各種新装備の概要がわかりやすく紹介された。特に、計画中の護衛艦について、厳しい予算の中で、ＤＤＨなどと併せて所要のＤＤ隻数を確保するため、就役時の性能よりも艦の生涯を通じて装備を追加、更新できるようにすることを重視した新しいコンセプトを導入しつつあることが熱く語られた。質疑応答の中では、会員からの多種多様な質問に対して、群司令から丁寧な回答がなされた。

講話終了後、試験艦「あすか」の作業艇と警備隊の交通船で、船越から吉倉桟橋まで移動を兼ねて横須賀港内見学が行われた。明るい日差しの中、気持ちの良いクルージングを楽しみながら、船越港では、元護衛艦「たちかぜ」、護衛艦「はつゆき」、「さわかぜ」、掃海母艦「うらが」など、吉倉港では「あすか」のほか、イージス護衛艦「きりしま」、護衛艦「いかづち」、砕氷艦「しらせ」、海洋観測艦「ふたみ」、試験艦「くりはま」など停泊中の各種艦艇を見ることができた。

吉倉港に到着し、Ｙ―３岸壁の試験艦「あすか」へと向かった。「あすか」は諸外国にもほとんど例を

見ない、計画当初から、開発中の装備品を搭載し、護衛艦と同等の環境下で海上試験を行うためのプラットホームとして建造された、最新の「たかなみ」型護衛艦とほぼ同程度の大きさを有するユニークな艦である。

「あすか」では、初めに格納庫において久保田艦長から艦の説明を受けた。現在、同艦は建造中の「ひゅうが」に初めて実装備される、ミニイージスとも言われる新射撃指揮装置（ＦＣＳ―３）、新ソーナー（ＯＱＳ―ＸＸ）及び新情報処理装置（ＡＴＥＣＳ）などを搭載しているが、既にその一部は「ひゅうが」に装備するため撤去されたとのことであった。この後、四組に分かれて、艦橋、ＣＩＣ、機関操縦室、食堂、居住区などを見学させていただいた。ラッタル（階段）で息をきらし「護衛艦でもこんなに急だったっけ？」、一般乗員の二段ベッドを見て「昔は五段だったのに…」というような声も聞かれた。

「あすか」見学を終えると、ちょうど日没となって、久しぶりに厳かな自衛艦旗降下まで見ることができ、充実した部隊研修となった。

その後、場所を近くのホテル・ハーバーに移し、東郷群司令、早野艦艇開発隊司令、高橋指揮通信開発隊司令を始めとする開発隊群の幹部及び先任伍長など多くの現役隊員の出席を得て懇親会が開催された。

佃会長、東郷群司令の挨拶に続いて、最も遠方の入間から本研修に参加した安野会員の音頭で乾杯し懇談に入ったが、これからの海上自衛隊の装備等についての意見交換や各種の思い出話などで時間の経つのも忘れて会は大いに盛り上がった。

最後に、本研修を有意義なものとするため、熱心かつ真摯に御協力いただいた東郷群司令以下の開発隊群の皆様に深く感謝するとともに、今後ますますの御健闘をお祈り申し上げる。

（田口理事　記）

大会の好天記録更新中！

第十五回横須賀水交会主催ゴルフコンペ

例年になく暑い夏の余韻が残る十月、第十五回横須賀水交会主催ゴルフコンペが二十三日（水）千葉県内のザ・鹿野山カントリークラブにおいて開催され、佃会長以下四十四名の同好者が集いました。

第十二回大会に幹事を交代して以来、ザ・鹿野山カントリークラブ名物（？）の霧中航行ラウンドは一度もなく、今次大会も好天にも恵まれた快適な一日となり「大会の好天記録」を更新中であります。例によって「こりゃあ～スコアが悪くても天気のせいにはできないなあ！」と予防線も、「当分の間、天候のせいでスコアの言い訳をするのは無理かな？」というあきらめにも似た声さえ聞かれるようになりました。年齢に関係なく半袖シャツでラウンドされる方もチラホラと……。

競技は白鳥、天神コースから二グループに分かれてスタートし、ダブルペリア方式で実施した競技は「優

勝・近藤義美さん、準優勝・初谷龍夫さん、三位は私・新田寛昭、ベストグロス賞（ジュニア）・小山　力さん、（シニア）近藤義美さん」という結果でした。今回も誉れあるベストグロス賞は「小山さんと近藤さん」がお地蔵さんのごとく定位置に座り込んだまま、私自身の入賞の喜びよりも悔しさのほうが大きく複雑な心境でもありました。お二人の技量の高さと不断の努力には、只々敬意を表するのみでした。

一方、合計八個のニアピン賞については重複受賞者がなく、参加された皆さんの技量の高さとしぶとさの表れでもあったように思われます。

ラウンドは好天にも助けられ順調に進行し参加された皆様はそれぞれのゴルフを楽しまれたようでしたが、いつになく皆さんの動きは活発で歩行距離は多かったようにも感じられました。私の勘違いだったのでしょうか？

今大会に参加された某氏（常務理事）のバッグには新品のアイアンセットが入っていました。スタート前には「某メーカーに勧められて新調し、今日のラウンドが大いに楽しみ」と張り切っていらっしゃいました。ラウンドを終わったところで結果をお尋ねしたところ「俺はもう彼らを信用しない！」と強く一言。ゴルフの技量とクラブは車の両輪のごとく大切であり、自分に合うクラブとの出会いもゴルフの楽しみの一つではないかと考えますが、皆さん如何ですか？

さて、平成二十年の大会は例年並みに五月及び十月に計画したいと考えており、細部日程は新聞等で別途連絡を差し上げる予定です。また、実施場所はザ・鹿野山ＣＣとし、大会の連続好天記録の更新に挑戦し続けたいと考えておりますのでよろしくお願いします。

なお、新たな参加希望者に関する情報、及びメールアドレスを変更された場合はご一報いただけると幸いです。

（新田理事　記）

横須賀水交会川村会員快挙
「岩手まで六〇〇キロ走破」

十月十三日（土）の読売新聞横須賀版に、元自衛官で横須賀水交会の会員である川村信吉さん（六十五）の活躍が、記載されたので紹介する。

なお、九月二十五日の読売新聞には出発の様子が掲載された。

（十月十三日読売新聞横須賀版）

定年退職記念と地球温暖化防止を訴え、「六〇〇キロマラソン」に挑戦していた横須賀市船越町、元海上自衛官、川村信吉さんが十二日、故郷の岩手県矢巾町役場前にゴールインした。予定より一日遅れたが、同級生や川村光朗町長ら約一〇〇人に拍手で迎えられ、河村さんは「生涯忘れられない感動」と目頭を押さえた。河村さんは先月二十四日、横須賀市役所前を出発。一日平均三十三キロのペースで国道四号線を北上した。現役時代は護衛艦勤務のほか、南極観測に六回参加した体力自慢だが、真夏並みの暑さによる脱水症状と筋肉痛に悩まされ、宮城県入りしたころからペースダウン。やむなく日程を一日ずらした。

リュックサックを背負い、帽子とTシャツ姿で両手を上げて役場に到着。河村さんは「力任せに走り過ぎ、途中で挫折しかけた。心配して駆け付けた友人らの協力でゴールできた」と話し、同級生と近くの温泉に向かった。

両手を上げてゴールした川村さん（岩手県矢巾町役場提供）

「ひゅうが」命名・進水式

十六年度計画でＩＨＩＭＵ横浜工場で建造中の護衛艦の命名・進水式が荒川横総監の執行により行われ、「ひゅうが」と命名された。防衛省から吉川海幕長及び横山装本長、会社側から今清水社長など見学者を含め約四千人が見守る中、横須賀音楽隊の演奏で国歌斉唱後、木村副大臣により、命名書読み上げ、支綱切断し、無事に進水した。

「ひゅうが」は「はるな」の代替更

新のため計画された新型のＤＤＨ。基準排水量一万三千五百トンは海自最大の自衛艦である。

艦名の「ひゅうが」は、日向（宮崎県）から採用されたもので、艦名に地方名を採用するのは初めて。

（記念艦「三笠」から）

戦艦「大和」特別展のご案内

この度、横須賀市市制一〇〇周年記念事業の一環として、呉市大和ミュージアム、記念艦三笠の主催による戦艦「大和」特別展（移動展）を、次により記念艦「三笠」において開催する運びとなりました。

ご承知のとおり、戦艦「大和」は、太平洋（大東亜）戦争末期に沖縄特攻水上部隊として敢然と出撃、九州南西方で敵航空機の猛撃を受けて散華し、多くの英霊とともに今も深海に眠っています。　世界最大最強の戦艦「大和」の建造技術は戦後の復興・発展の礎となり、また、その名は今なお日本人の心に深く刻まれております。

この特別展を通じて戦艦「大和」の生涯を知り、その功績に想いを馳せ、遺訓を学ぶことは大きな意義があるものと思います。

是非ご来艦いただきますようお願い申し上げます。　（引き揚げられた遺品も展示いたします。）

一　期日　十一月十日（土）～一月三十一日（木）
（休艦日　十二月二十八～三十一日）
二　場所　「三笠」企画展示室
三　問合せ先　記念艦「三笠」
横須賀市稲岡町八二―一九
（０４６―８２２―５２２５）
http://www.kinenkan-mikasa.or.jp

秋の叙勲受賞者

十一月三日　次の二名の会員の方々が叙勲を受けられました。

（敬称等略）

瑞宝小綬章　海野　幹郎
同　櫻澤　清志

（初谷副会長　記）

訃報

本年六月以降、次の会員が逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

（敬称略）

川浦國平（横鎮T15）　六月　八日
森川九次郎（海兵61）　七月　一日
田口康生（海兵71）　七月十六日
中村　弘（准講）　八月　三日
松島清吉（幹講）　八月　四日
堀川政男（幹予08）　九月　十日
赤尾関通正（幹候15）十月二四日

（初谷副会長　記）

新(編)入会員(六月～九月)

次の方々が横須賀水交会に新たに入会（編入）されました。

（敬称略）

鈴木英隆（幹候25）　升方　清三（幹候28）　天川　勝昭（幹候26）　安部徳次郎（遺族）　梶村　博志（幹候26）　西村　義夫（有志）　猪山　誠（有志）　角田　繁（幹候21）　服部　寛治（有志）　石渡　保（有志）　田中　典子（家族）　田谷　法雲（有志）　吉田　かをり（有志）　柴藤　隆士（幹予54）　山田　靖男（舞教06）　稲垣　正義（幹予36）

（河村理事　記）

編集後記

このたび、田口理事から編集を引き継ぎました。新聞は会員皆様からの投稿により成り立っております。内容の充実のため、皆様方のご協力・ご支援をよろしくお願いします。

（岩永理事　記）

横須賀水交会ホームページ
http://y-suikoukai.daa.jp/